

新潟大学人文学部・佐渡市教育委員会連携協定事業

## 第8回 佐渡学セミナー記録集

月 日 平成31年2月9日（土）  
会 場 あいぽーと佐渡  
主 催 佐渡市教育委員会  
共 催 新潟大学人文学部

### 講 演

「沖縄・八重山諸島の現在 —シマ毎の多様な「自治」をめぐる—」

新潟大学人文学部准教授 加賀谷 真梨 氏

### 調査報告

「泉地区の民俗調査から」

新潟大学人文学部民俗学研究室

## ごあいさつ

佐渡市 副市長 ふじき のりお 藤木 則夫

みなさんこんにちは。佐渡市副市長の藤木と申します。三連休初日のお昼に、会場いっぱいのお客様にお越しいただき、改めて、皆さんの文化への関心の高さを実感した次第です。

この佐渡学セミナーは、平成 22 年から新潟大学の人文学部と佐渡市が連携し、佐渡について学ぶ場を持つために行ってまいりました。ご案内の通り、佐渡は、宮本常一先生がくまなく回られて、様々な調査をし、魅力を発掘された島です。豊かな自然、豊かな文化に育まれた人々の暮らし、それらが混然一体となったものが佐渡の価値だと思っています。

今日は、新潟大学人文学部の加賀谷真梨先生から、沖縄の事例を話して頂くことになっています。八重山諸島は佐渡と同じく離島です。風土気候は全く異なる島ですが、人々の暮らしの中には共通するものがあり、生活の知恵などがそれぞれの自然の中、文化の中で育まれ続けていると思います。私もまた一つの学びの場になればと思います。

また、学生の方から、泉地区での調査研究の発表があります。泉地区というのは、順徳上皇や世阿弥ゆかりの地でもあり、鬼太鼓をはじめとする様々な文化・芸能が培われた土地でもあります。そのようなところで、新潟大学の学生さんが、外からの眼で見て、どのように受け取ったのかを伺い、学びの場にしたいと思います。私自身、歴史、文化、自然の中で育ち、そこで生活することに誇り、自信を持って生活していきたいと思ひますし、今日のセミナーが皆様にとってそのきっかけになればと思っています。

新潟大学の先生方には、お忙しい中佐渡までおいで下さり、ありがとうございます。簡単ではありますが、開催にあたりましての挨拶に代えたいと思います。ありがとうございました。

## ごあいさつ

新潟大学人文学部 学部長 さいとう 齋藤 よういち 陽一

みなさんこんにちは。学部長としてセミナーに来るのも3度目になります。3度目になると、ご来場くださった皆さんの顔を見て、「見覚えある方がいらっしゃるな」と思ったりします。人文学部と佐渡市教育委員会は連携協定を結んでおりまして、このような形で皆さんとお付き合いさせて頂いています。本当にありがとうございます。

今、藤木副市長の話にもありましたが、今回のテーマは「島」という事です。私はロシアが専門なものですから、つい考えてしまうのですが、択捉島と国後島は佐渡よりも面積が大きいんですね。現在、その次に大きいのが沖縄本島で、それから佐渡という面積の順番だそうです。今日は南の方の沖縄の暮らしぶり、佐渡の暮らしぶりが似ているのか、似ていないのか、とも考えています。本セミナーのポスターに載っている写真は、どちらの島の方も幸せそうな顔で写っているなど拝見していました。

この連携協定は、セミナーの様な行事の他に、新潟大学の学生がそれぞれの地区に入り、お祭りに参加したり、民俗調査などをさせていただいたりしています。今回は、人文学部の教員の講演と、学生の調査報告をするという構成になっています。私自身も、泉地区ではありませんが、他の地区のお祭りに参加させていただきまして、太鼓を叩かせていただいたことがあります。先ほど泉地区の祭りの様子を映像で見ましたが、私が参加した地区とは太鼓のたたき方が違うな、色々な形があるのかなと思って、調査報告を非常に楽しみにしています。

この後、本日は長丁場となりますが、皆さんと一緒に楽しみたいと思います。よろしくお願ひします。

## 目 次

講演 「沖縄・八重山諸島の現在 ―シマ毎の多様な「自治」をめぐって」

講師 新潟大学人文学部 准教授 加賀谷 真梨 氏 ..... 1

調査報告 「泉地区の民俗調査から」

講師 新潟大学人文学部民俗学研究室 ..... 23

## 沖縄・八重山諸島の現在 ―シマ毎の多様な自治をめぐって

新潟大学人文学部 准教授 <sup>かがや</sup>加賀谷 <sup>まり</sup>真梨

### 【主な論文・著書】

「沖縄県・小浜島における生涯教育システムとしての年中行事」『日本民俗学』242 : 35-63 (2005年)

「沖縄研究にみられる「女性の霊的優位」言説の再検討―「ヲナリ神信仰」再考」『比較家族史研究』24 : 96-110 (2010年)

「プロセスとしての〈共同体〉―沖縄・波照間島の「戦争マラリア」をめぐる語りを事例に」『東洋文化』93 : 79-97 (2012年)

「ジェンダー視角の民俗誌―個と社会の関係を問い直す」門田岳久、室井康成編『〈人〉に向きあう民俗学』森話社、pp.156-187 (2014年)

「子どもも親もみんな育てる」道信良子編『いのちはどう生まれ、育つのか―医療、福祉、文化と子ども』(岩波ジュニア新書) pp.95-106 (2015年)

「再分配制度としての介護保険法とコミュニティの再編」浜田明範編『再分配のエスノグラフィー―経済・統治・社会的なもの』悠書館 (2019年)

ご紹介に預かりました加賀谷と申します。本日はよろしくお願ひします。最強寒波到来と言われている中で、このように多くの方にお集まりいただき、大変嬉しく思っています。また、佐渡市教育委員会の方々におかれましても大事なセミナーにお声がけいただきありがとうございます。

私は、3年前に新潟大学に民俗学の教員として着任しました。それまで新潟とも佐渡とも縁もゆかりもありませんでしたが、着任後に5回程佐渡に来ました。この後の調査報告にある旧金井町の泉地区と旧赤泊町の徳和地区で学生の指導をしてきました。

私たち民俗学ゼミは集落の歴史や、生活の営みを掘り起こすような活動をしており、小さな集落に学生が20、30人と押しかけることもあります。しかし、佐渡の皆さんはどの地域に出向いても学生たちを温かく迎えて下さって嫌な顔せずにお話して下さっている姿に、沖縄に通じるものがあるなど思っていた次第です。ただし、徳和に行くには山を越えていかなければならないのですが、道路工事が非常に多いなという印象も受けました。あっちに迂回して、こっちに迂回してという感じでなかなか到着しないので、晩年の宮本常一先生が嘆いていた

「公共工事に依存しているような状態」がまだ続いているのかなとも思った次第です。

そのようなときに本セミナーの依頼を受けまして、佐渡を知らない私が一体何をお話すべきかかなり迷いましたが、私が20年ほど通い詰めている沖縄の八重山諸島と佐渡の間にはいくつかの共通点があることに気付きました。

まず、共通点の一つ目は、宮本先生も常々おっしゃっていましたが、東京を中心とし佐渡がその周縁に位置づけられるような、中心と周縁との間に階層構造が見られる事です。沖縄における階層構造とは、沖縄本島、石垣島、さらにその先の離島といったように、本島の都市部から離れるにしたがって政治経済的な階層差がみられる点です。共通点の二つ目は、一つの集落村落ごとに独立性や自立性が非常に強いという点です。その他にも、人口流出や少子高齢化と対峙してきたことや、伝統的な行事などが形を変えつつも継承されている事などの数多くの共通点に気付きました。

そこで、地政学的条件を同じくする八重山諸島の話をする事で、八重山の人たちがどのように眼前の課題と向き合い対処してきたのか、その実践のありようをお示しすることが一番いいのではないかと思った次第です。それゆえ、本日は「沖縄・八重山諸島の現在—シマ毎の多様な「自治」をめぐる—」というタイトルで話をさせていただきます。佐渡からは地理的にも心理的にも遠い南の島の話になりますが、今後の佐

渡の未来、あるいは集落における今後のあり方を考えていただくヒントにさせていただければと考えています。

タイトルにあげた「自治」という言葉ですが、これは、自主性とか自立性とか、公共性という様な言葉で置き換えられるような、地域の共存性の事を示しています。自治というと、自治会とか寄合というようなものをイメージしがちですが、この講演では「自治」を自立性、自主性を表わす言葉として使用しようと思います。むしろ、そのような自立性や自主性が、個々の集落でどのようにして生まれて、誰がその自立性や自主性を支えて、どのように維持されているのかということについて、多様なパターンを見ていきたいと思います。従いまして、講演の流れとしては、60分を3つのパートに分けます。

最初のパートは、離島研究のあゆみについてお話をさせていただき、研究者が離島というものをどのように認識して研究を行ってきたのか、少しだけ触れたいと思います。

次のパートは、NHKの連続テレビ小説「ちゅらさん」で一躍有名になった小浜島についてお話します。私が、後で登壇する学生と同じくらいの年頃に調査した思い出深く印象深い島でもあります。この島は、テレビなどでは沖縄のイメージにマッチした南の島として描かれていましたが、実は本土資本の巨大なリゾートホテルを誘致しています。そして、ホテルがありながら、現在でもなお秘祭といわれる祭り——いわ

ゆるシマ以外の者に言うてはならないし、写真も公開してはならないし、その情報も一切漏らしてはならないと言う祭りーが行われている島です。それだけでなく、数多くの年中行事が行われているのですが、資本主義的な生活リズムと伝統的な生活リズムをどのように併存させているのかを考えたいと思います。

最後のパートは、波照間（はてるま）島という、最南端の有人島を取り上げます。波照間島は、沖縄の久高島——沖縄本島を作った「アマミキヨ」という神様が降り立ち、沖縄本島を作ったといわれる非常に靈験あらたかな島——と同じように、神に対して祈願したり、働きかけたりする神行事が非常に多く行われ、土着信仰が強い島でした。しかし、急速にその信仰心が形骸化してきた一方、他の地域には見られない共同労働が残っています。小浜島も波照間島もサトウキビを作っているのですが、サトウキビのキビ刈りは、いまだに「ユイ」で行っています。それだけではなく、介護保険法が制定された2000年を契機に、島の人たちで島の年寄りを支えようとする新たな取組も始まりました。後ほどお話しますが、政治経済の中心である石垣島から船で一時間、新潟と佐渡くらいの距離が離れており、人口が500人程度の離島でも、島のお年寄りを支える営みが始まっているのです。

以上が大体の発表の流れですが、是非講演後に、「これは佐渡では無理でしょう」とか、「これだったらいけるかも」とか、皆さんの感想を聞かせていただければ幸いです。

## 【1. 離島研究のあゆみ】

配布資料（本誌12ページ以降）をご覧ください。離島研究は1950年代から本格的に始まりましたが、奄美・沖縄に着目すると戦前から行われていることとなります。特に奄美・沖縄に関しましては、柳田国男や折口信夫などの著名な民俗学者が「沖縄にはかつて日本にあったであろう生活文化の原型があるんだ」と、沖縄に日本の原型、祖型を見出し、研究を続けた次第です。つまり、沖縄は日本がどのように歩んできたのか、日本を知る手段に用いられたわけです。

そのような研究者の認識は、戦後もしばらくは続いていました。九学会連合会という組織も、同様の関心に沿って日本全国の離島で学問分野を越えた総合調査を行ってきた次第です。九学会連合会は、1947年に渋沢敬三の提案によって発足した学会連合組織で、宮本常一もこの会に加わっていたことから、佐渡が調査地に決まったという経緯があります。

この九学会連合の離島調査のうち初期の調査を見ていると、「どこまでが日本文化圏か」「どこまでが日本人が住んでいたのか」など、日本文化圏を定義することに関心を置いていたことがわかります。例えば、人類学者は、骨格や血液型など人間の身体の形質を調査しながら、その人種の特徴などを導く研究をおこなっていましたので、日本人類学会では「対馬は果たして日本文化

圏に入るのか、中国の大陸文化圏に入るのか」という疑問を、頭蓋骨の形、血液型などで検証し、「対馬は日本文化圏である」といった結論を出していました。当時の調査は、ここが確実に日本文化圏であるということを実証するような、言ってみれば目的や結論ありきの調査で、調査地の人たちも日本文化圏だと研究者に同定されることを望んでいたようです。

その中で、九学会連行会の調査にも出向いて、実際に対馬や能登半島、もちろん佐渡に足を運んだ宮本常一は、他の研究者たちとは路線を異にして、実践的な提言をしてきました。佐渡の方に宮本常一について話すのは、釈迦に説法のようなので、あまり深くお話しませんが、一つだけ確認しておきたいのは、九学会連合会など多くの同時代の研究者の中で、地域振興に関して地域にアドバイスした研究者は、彼だけだったであろうと言われていることです。逆に、宮本は実践家であって研究者ではないのではないという批判を聞くこともありますが、地域を総合的に見ようとする視点を持ち続けていた点は評価できると思います。また、宮本常一は調査被害についても糾弾していました。当時の学会の中では、調査が「暴力的」になり得る、調査する者が情報を取捨選択して答えありきの調査しているのではないかと、調査される人たちは時間を取られるだけで、結局何の利益もないのではないといった批判は珍しかった次第です。今でこそ人文系の学者は調査が権力性を帯びやすいことを認識して調査していま

すが、宮本常一が研究者の立場性を糾弾したこと、またそのような批判が出来たのは、彼が地域の人たちに溶けこんで、地域の立場に立っていたからに他ならないでしょう。ちなみに、配布資料 1 ページ目最下部に、ジェームス・クリフォードとジョージ・マーカスの『文化を書く』という本を記しました。この本は、フィールドワークをして、報告書を書く、文化を書くという行為がいかに権力性を帯びているのかという問題を、アメリカで初めて提起した本です。言ってみると、宮本常一はこの本よりも 10 年以上前に、同様の問題を理解し、指摘していた事が分かります。

さて、先ほど日本を知るために沖縄研究が展開したと話しました。しかし、1960 年代以降の沖縄研究は、日本という枠を切り離して、沖縄の固有性を明らかにしようとする研究が積み重ねられました。例えば、沖縄にはユタと言われる霊的職能者がいます。60 年代以降は、ユタをはじめとする沖縄固有のテーマに特化して研究が発展しました。それは、ムラ全体や、ムラと中心（都市）との関係性を総合的に見ようとしていた宮本常一の視座とは大きく異なっていたといえます。

ところが、2000 年以降、とりわけ 2010 年代に入ると、沖縄の離島を包括的に見ようとする機運が高まってきました。宮本のまなざしのように、「沖縄の離島は国民国家を相対化し得る歴史的・文化的蓄積を持つ地域である」と。「周縁として中心との間に



格差が生じるけれども、新たな価値を生み出す地域である」、「狭小性、隔絶性などを背景に、島民の生活が島の資源に大きく依存すると共に、共住を基盤とした地域自治や住民の共同性が不可欠な地域である」と。

このように問題と強みの双方をふまえたうえで離島に着目し、離島に生きる人たちは制約を負いながらもそれに対峙する技を獲得しているのではないかという見方が共通認識となってきたのです。私はこうした見方が高まった 2000 年頃に研究に着手したので、本日も離島に生きる人たちの戦術に着目した話をしていきたいと思います。

## 【2. <sup>こはま</sup>小浜島について】

小浜島は、行事の島とも言われるほど、年中行事が数多く行われています。行事といえども事前に準備や稽古もあるので、そのような時間も含めると、1年の約 1/6 を行事に費やしていることとなります。人口は私が調査した 2002~2004 年頃は 450 人程度です。ただ、それ以降かなり人口が増加していますので、小さな離島でなぜそれが可能かについて考えたいと思います。

地理的位置について最初に確認します。沖縄全体の地図（本誌 19 ページ）の、右上に沖縄本島があり、そこから南に約 400km 離れたところに八重山諸島があります。近くには宮古諸島があり、八重山諸島と宮古諸島をあわせて先島諸島と言います。

八重山諸島には石垣市、竹富町、そして与那国町の 3 つの自治体があります。空港は石垣市にあり、観光客は沖縄本島から約 1 時間のフライトで石垣島に来ることができます。竹富町の島々や与那国島には、石垣島から船に乗って渡ります。石垣市が八重山諸島の政治・経済的中心地であり、大きな病院もあります。珍しいことに、竹富町の町役場も住民のアクセス重視のため石垣市にあるのです。竹富町は 9 つの有人島からなります。沖縄県全体で 49 の有人島がある中、9 つが八重山諸島にあることとなります。小浜島は八重山のへそと言われるように、八重山諸島のちょうど真ん中に位置しています。八重山の島は標高の高い島・低い島と 2 つに分かれています。小浜島は中心に大岳という標高 100m ほどの山があるので、高い島となります。

小浜島は、基本的には農業中心ではありませんが、1972 年の復帰後にリゾートホテルが誘致され、第 3 次産業も盛んです。例えば、2000 年の産業別就業者数によると、小浜島全体で 253 人のうち第 3 次産業が 156 名 (61%) と最も多く、農業従事者は 77 名となっています。農業は、サトウキビの生産、畜産が主で、島の大部分はサトウキビで覆われています。リゾートホテルは島の 4 分の 1 ほどの敷地に 3 軒立っています。

リゾート開発と聞くと、本土資本に土地を売り渡したような、負の遺産イメージがありますが、小浜島では島の人々がホテルを誘致した点が特徴です。というのも、1972

年に沖縄県は本土復帰しますが、前年の1971年には長期干ばつ、大型台風が襲来し、農業収入が得られなくなり、若者はどんどん島を離れてしまうような状況がありました。そこで、小浜島の小浜集落が小浜島結成会を結成し、リゾートホテル誘致を決めたわけです。本土復帰すれば、本土から多くの観光客がやってくるだろうから島が潤うに違いないと考え、株式会社ヤマハへ土地を売却する事が決まりました。ヤマハによって経営されていたのが「はいむるぶし」というリゾートホテルで、2000年頃にヤマハが土地の一部をユニマットという会社に売却し、そのエリアの中に新たに2つリゾートホテルができました。

さて、私が小浜島を訪れたころは、ヤマハ・リゾートホテルはいむるぶしが開設されてから、既に25年ほど経っていました。島に実際に足を踏み入れる前には、多くの人がリゾートホテルで働きそこから恩恵を受けているに違いないと予想していましたが、その予測は見事に裏切られ、ホテルで働いている島民はとて少なかったことに驚かされました。たった10名ほどしか在来の住民が勤めていなかったのです。クリーニング業、運送業、港からホテルまで観光客を運ぶ仕事など、ホテルができたことで新たな事業をはじめて利益を得ている人はいましたが、それも数えられるほどでした。民宿の数も増えず、以前からある5軒のままです。また、お土産などの商品開発の動きも特に見られず、一步集落に足を踏み入れるとリゾートホテルがある島とは思えな

い、昔ながらの様子がありました。

とはいえ、目に見えて「島がホテルに支えられているな」と感じたこともありました。離島において小学校の存続は集落の死活問題ですので、ホテルの従業員の子どもたちが小中学校に修学している点に、島の住民全体が恩恵を受けているなど感じました。また、未婚者はホテル敷地内の寮で生活をして、所帯をもった人は集落で生活していますが、集落内に居住していながらも島の人たちとの距離感は否めません。その距離感というのは、お互いに排他的というのではなく、本土から来た人たちの方が、在来の島民に遠慮している様な雰囲気でした。島に巨大なホテルが出来ると、島が搾取されて生活が変えられてしまうというイメージがありますが、それと逆転した、むしろ島の人たちが主導権を握り続けている状況がみられたこともこの島の特徴でした。一体なぜそれが可能なのかというと、やはりここが行事の島だからという事が大きいのではないかと思います。

冒頭でも言いましたが、小浜島の小浜部落では1400年代から続いているとされ、今でも秘祭として行われている豊年祭があります。その時には、集落内への観光客の侵入は禁止され、まさに結界を張るような感じで、かなり排他的に祭りが行われます。かつて八重山諸島には、薩摩藩に納める税の徴収のため首里の役人が赴任していました。地域住民はその「人頭税」を納めるために過酷な労働を強いられていましたが、

そのような時代においても豊年祭は行われていたそうです。

この豊年祭を現在でも存続させていることが、実は小浜島の住民とホテルとの共存を可能にしていることを述べたいと思います。というのも、島の人たちが豊年祭の存在等を盾に、ある意味「戦略的本質主義」という立場をとっているのです。

本質主義とは、例えば、沖縄人とか、小浜の人というカテゴリーに共通の本質や真実があるという考え方です。あるいは文化というものを、ある人々が普遍的に持つ本質として見なすことを指します。本来、文化とは時代の流れと共に変わって行くもの、変わらざるを得ないものですが、本質主義的認識とは、伝統文化は変わらない、文化とは非常に大切なものであるといった考え方のことを言います。「小浜の人たちは行事ばかりで、行事のことしか頭にない」という表現も、本質主義的な表現といえます。

さらに、この本質主義に「戦略的」と付いた「戦略的本質主義」という言葉もあります。戦略的本質主義とは、本質主義的な考え方を逆手にとって利用する立場のことを意味します。例えば、移住者は小浜の自治会組織の中に役員として加わっていませんし、加わっていない事に対して移住者から反発も生じない。移住者やホテルで働く人たちの多くは、「沖縄文化」に惹かれたり、魅力を感じたりしている、いわば本質主義的立場の人が多く、「伝統」を守っている小浜の人たちに尊敬の念や畏敬の念を持っています。そうした移住者の小浜島に対する

認識を逆手にとり、移住者を自治組織に加えないまま、またそれに対して反発も生じさせずに共存している。その在来の住民と移住者との間の文化本質主義で媒介される絶妙なバランスが、小浜島が行事を行い続け、ホテルとの共存を図れる要因であるように思う次第です。

また、小浜島では祭りや年中行事ごとに、この年齢の人はこの役割を担う、という決まりがあります。鬼太鼓で例えると、小学生になったら打ち子に、高校生になったら鬼の面をつけられる、さらに年齢を重ねると役員として門付けの先導をするといったように、行事ではおよその年齢階梯ごとに役割が存在しています。小浜島にも行事それぞれに年齢ごとの役割が定められていて、踊り一つをとっても、小学生が踊れる演目と、高校生になってからできる踊り、二十歳を過ぎてからできる踊りは異なります。さらに年間行事数が多いということは、若者たちは小さいころから様々な行事の中で役割を与えられ、自分の成長を他者との関係の中で実感できるわけです。「今年ようやくこの役割ができる」といった動機づけが、若者たちに「島に戻らなきゃ」「島に帰って行事を支えなきゃ」という気運を高めるのに寄与しているのです。

### 【3. はてるま波照間島について】

配布資料 5 ページ目 (本誌 21 ページ) に入ります。次は、波照間島の事例です。波

照間島は八重山諸島の一番南に位置しており、石垣島から船で1時間、一日に船が3便しか就航していない上に、天候によっては途中で止まったりしてなかなか行き着けない最果ての島です。サトウキビの生産・加工が基幹産業で、人口は550人前後、世帯数も200少しあります。

波照間島では、賃金制の共同労働で行われる「ユイ」があります。無償で労働奉仕するユイとは異なり、5分単位で労働時間を記録し、働いた分だけ自分が所属する組から賃金が支払われます。波照間島には5つの集落があり、各集落を2~3組という組単位に分けサトウキビの刈り取りを行っています。キビ刈りに来てもらった家は、来てくれた人たちに払われる費用を自分の収益から引かれ、残額を製糖工場から入金されるというシステムで、地域のつながりが今でもかなり強い地域です。

波照間島では、この協働労働における人と人との結びつきに目を付けた沖縄県立大学の教員が、お互いに助け合う気持ちを介護に活かせないかと島の住民に提案し、高齢者にデイサービス（サロン）を提供する施設が作られました。それが「すむづれの家」です。すむづれの家は、島の人たちが仕事としてデイサービスを提供しますが、介護認定を受けていない人も利用できる、誰もが通える施設として誕生しました。当初は週5日開所し、日ごとにパソコン、歌、ゲートボール、三線等やることが決まっており、高齢者は自分が好きなことが行われる日に通います。すむづれの家ができて既

に15年経ちますが、この間施設は発展的に展開し、2013年には介護保険法にのっとった小規模多機能型介護施設になりました。介護保険の介護事業に新たに着手したことで島がどう変わったのかを、資料を見ながらお話しします。

小規模多機能型施設とは、いわゆる「通い（通所）」「訪問」「泊まり」の3つを組み合わせ利用する施設です。通常すむづれの家への「通い」がメインですが、台風時には単身者を施設に集めて「泊まり」、また、朝晩にはスタッフが利用者の家に「訪問」し身支度や排泄介助を行うようになりました。この小規模多機能型施設の一番の利点は、施設要件が非常に緩いことです。要は、有資格者である看護師やケアマネージャー、施設代表こそ必要ですが、実際にお年寄りを介護する人には資格が要りません。これが沖縄の離島の社会状況に非常にマッチしているわけなのです。

職が少ない離島では、仕事は争奪戦です。仕事と言えば、製糖工場での勤務、共同売店の売り子、民宿経営、飲食業者がありますが、旧来からの農業従事者は減り、大規模農家が零細農家から畑を借り受けてサトウキビを生産しています。そのような中、資格が不要な介護施設は、職探し中の人、子育て世代の女性、さらには移住希望者の仕事の受け皿になっているのです。特に、小浜島や波照間島のような小規模離島への移住は、島の人が家を貸さないため困難です。もし家を貸してしまうと、家主の親族がお盆の時に帰る場所がなくなる、家に置

いてある位牌を移動しなくてはならない、などの理由から、空き屋なのに人に貸さないことが通例です。借りたい人がいても、家を貸してもらえないという状況があります。それでも南の島で暮らしたいという人たちは少なからずいて、介護施設が用意した寮に住みながら施設で働く、あるいは民宿で住み込みの仕事をしながらパートタイムで介護に従事するといったことで、本土出身者の移住が容易になりました。

また、雇用を生み出すだけではなく、ともすれば閉鎖的になりやすいシマに、人が行き来できる空間が作られたという意味でも、この介護施設は非常に重要だと思いません。施設がそのように展開していった背景として、自分たちの営みの再評価があった点も忘れてはなりません。お年寄りを最期まで島で暮らせようと介護保険事業に着手したのは、波照間島にはユイの精神、相互扶助の精神があるといった、いわばシマの他者表象を、自分たちの表象として受け入れたことがその背景にあります。つまり、自分たちは今でも協働労働をしているし、盛大に祭りも行っていて団結心があるのだから、その精神をいま一度発揮させようと、他者からの表象を契機に自分たちの行為実践を見つめ直したわけです。これを「再帰性」ということができるかと思いますが、波照間島にはこうした再帰性により、祖先と自分が生まれた場所で高齢者が最期を迎えることが可能になったのです。

#### 【4. 総括】

配布資料 6 ページ目（本誌 17 ページ）の「4 まとめにかえて」をご覧ください。

沖縄の多くの離島において、守り続けようとしているものがあります。それは 1960 年代に成立した新しい景観ではありますが、サトウキビが広がる畑、青い海、そして民俗芸能が行われる景観です。本日もご紹介した小浜島では、リゾートを誘致し、その恩恵を受けながらも伝統的な祭祀行事を武器に、本土資本に主導権を奪われずに、自律した営みを可能にしていました。隔絶した場所にある波照間島では、効率的な労働力確保のために成立したと考えられる協働労働の仕組みに、互助精神を見出し、それを援用しながらお年寄りを最期まで島で看取することを可能にしています。

このような八重山諸島の自治のあり方を佐渡でそのまま踏襲することはできませんが、地域社会の今後のあり方を考える上で、何かのヒントにして頂ければと思います。これをもちまして、私の話を終わらせて頂きます。

#### 【質疑応答】

##### ◆質問

佐渡から出た人も、お盆には帰ってきたり、祭りに参加する為に帰ってきたりしますので、民俗性に関しては共通するところがあると感じました。

小浜島の人口推移ですが、1945 年から下がっていた人口が、リゾートホテルの建設

(2002年～2004年)で一旦増え、その後の平成17年、平成22年で下がり、平成27年には100人ほど上昇しています。これは何故でしょうか？

◆回答 (加賀谷)

感想・ご質問ありがとうございます。リゾートホテルの開設状況を少しお話しましたが、2001年に新しいホテル「南西楽園」が開業し、さらにその後、敷地内により高級志向のホテルの開業があり、この人口の増加はそれらのリゾートホテルの増加に伴ったものと理解しています。

◆質問

小浜島について、地元住民の過疎が進むことと、他の人は入れないという行事の可能性について教えて下さい。

◆回答 (加賀谷)

「過疎が進み、行事が継続しなくなるのではないか？」という事でしたら、私の見立てでは、行事は今後も継続し、なおかつUターン者がある程度確保していくものと考えております。現代はネット社会で、情報も流出しやすくなっていますが、他方で自文化を相対化する機会が増えたように思います。それに伴い、「伝統的」な祭祀に参加できる自分といった自己相対化の場面が増え、シマ出身者としてのアイデンティティはより強固になっていくのではないかと考えています。

◆質問

昨年、沖縄本島のビルに住んでいる親戚より、台風が来てガラスが割れたという話を聞きました。場所が違えば生活の様子が違うので、教えて頂ければと思います。

◆回答 (加賀谷)

石垣島などには鉄筋コンクリートのビルが立ち並ぶ都市的な景観が見られますが、本日お話した小浜島や波照間島の集落においては木造住宅で、土台は100年ものという建物もあります。コンクリートで新たに作った家もありますが、いずれにせよ高くても2階建てで、景観を損なわないような配慮もなされているようです。

◆質問

沖縄の島と大和の島の違いを考える場合、配布資料にもある通り、カタカナの「シマ」について触れる必要があると思います。最終単位としての「シマ」、アイランドの「シマ」、集落単位の「シマ」があると思いますが、佐渡を考える場合のヒントになりそうなのですが、いかがでしょうか。

◆回答 (加賀谷)

本来は冒頭で「シマ」について説明すべきでしたが、失念してしまいました。ご指摘ありがとうございます。

カタカナの「シマ」は、沖縄では集落や共同体という意味で使われており、アイランドの「シマ」ではありません。英語で言うところの、コミュニティに近い意味で使われています。

沖縄は、一つのアイランド（離島）の中に、複数のシマがある場合もあります。小浜島も、実は小浜集落の他に、西表島に近いところに、沖縄本島の糸満から移住してきた漁民集落である細崎集落があります。小浜島には2つ「シマ」があるわけです。他方、波照間島の場合、5つの集落はありますが、「シマ」は1つとして認識されています。島ごとに集落のあり方が違い、理解が難しかったのではないかと思います。大変失礼しました。

---

## 沖縄・八重山諸島の現在 ―シマ毎の多様な「自治」をめぐる

加賀谷真梨（民俗学）

---

### 概要

宮本常一が標榜した地域の自然と文化の固有性に立脚した内発型の地域づくりを、国庫からの補助に依存した開発行政や消費社会に回収されずに、どう進めていくことができるだろうか。現在の沖縄・八重山諸島のシマレベルでの実践から考えてみたい。

### 1 離島研究のこれまで

1950年代 九学会連合会による離島調査<sup>1</sup>（①対馬 1950 - 51、④佐渡 1959-61、⑦沖縄 1971-73、③⑧奄美 1955-57・75-77 etc.）

「辺境」への関心…「日本人」「日本文化」の境界を定義する営み（坂野 2011：186）

奄美・沖縄は海外での研究を検証する「実験場」、フィールドワークの「訓練所」（崔他 1996）

### 宮本常一

1953年 離島振興法制定 → 全国離島振興協議会事務局長就任

「地域的にはある独立性を持ちつつ、社会経済的には本土へ何らかの形で従属的に結びつかねばならない運命を持った世界（宮本[1958]1969：17）」

「おくれをとりもどすために、国家資本の投下により資本主義的な政治組織の中へ社会主義的なものをみちびき入れなければならない」（宮本[1955]1969：37-38）

→「親島」への依存度の高まりをいったん受け入れつつ、離島民の生産体制の改善に力点（石原 2012：143）

#### ・佐渡における地域起こしの実践

八珍柿の生産奨励、小木民俗博物館開設、周回道路整備 etc.

→この時代唯一無二の実践的研究者

#### ・学術界の「科学」第一主義に対する批判としての調査地被害の糾弾（宮本 1972 [1986]）

「国東半島を歩いていた時のこと。それ以前にもこの地方に立派な民俗学者が来て調査したことがあるということだった。その学者に土地の人が「こういこうとはないか」と聞かれて「ない」と答えると大変不機嫌で「ないということはないはずだ。あったのが消えたのかもわからないし、あなた自身が体験していないだけのことかも知らぬ」としかるような調子でいわれたという。調査というのが、あたかも百姓が待に叱られているような有様であった。（宮本[1972]1986：114）」

cf. J.Cliford &J.Marcus edu.1986. *Writing Culture* (『文化を書く (1996)』)

<sup>1</sup> 1947年に渋沢敬三の提案によって発足した学会連合組織。六学会連合として発足し、順次学会が加入して九学会連合となった。参加したのは日本人類学会、日本社会学会、日本考古学会、日本言語学会、民間伝承の会（現・日本民俗学会）、日本民族学協会（現・日本文化人類学会）、日本地理学会、日本宗教学会、日本心理学会。1989年の解散まで計11回のフィールド調査を実施。



## 宮本常一礼賛に対する民俗学者の懸念

「宮本の実践は、存命中は抜群のファシリテーターとしての能力を発揮し、現地の人々を多に活気づけた。—中略— 佐渡に限っていえば即物的には一見成功に映るが、外部への依存を強めたにすぎず、この観点からはむしろ失敗ということもできる」(岩本 2012 : 54)

「宮本の博物館計画、それを支える開発思想もまた、参加や協働に意義が置かれ、確かにある時期にその盛り上がりは存在した。だが運動であるがゆえの限界は、—中略— 「参加」の次にいかなる目標や理念を打ち出すことができるのかという、日常化、つまり生活のなかに運動をランディングさせる手法の欠如であったといえる。」(門田 2017 : 36)

2010年代：沖縄の離島への再注目・再ブーム（特に社会学者による沖縄研究が盛ん）

○離島を研究対象とすることの意義 杉本久未子編著『変貌する沖縄の離島社会（2012）』

- i) 国民国家を相対化する歴史的・文化的蓄積を持つ地域である。
- ii) 中央から離れた地域であるために中心—周辺格差が生じると同時に、周縁として新たな価値を生み出す地域である。
- iii) 狭小性、隔絶性などを背景に島民の生活が島の資源に大きく依存すると共に、共住を基盤とした地域自治や住民の共同性が不可欠な地域である。

→地域の自然と文化の固有性に立脚した、内発型の地域づくりが必要不可欠

○石垣島を研究対象とすることの意義

関礼子・高木恒一編著『多層性とダイナミズム—沖縄・石垣島の社会学（2018）』

→動的なダイナミズムを捉えつつ生活世界を眺望することで「沖縄」としての画一化に抗することができる。

国防上の関心の高まり（国家による介入）に抗する手法の模索

★地域の自然と文化の固有性に立脚した内発型の地域づくり（自治）は、八重山の個々の島レベルでどのように展開してきたのか。

## 2 行事の島—小浜島の現在<sup>2</sup>

人口：451人、235世帯（平成12年国勢調査）

地勢：「果報の島」と呼ばれ肥沃な土地を有する。戦前から稲作を中心とした農業で、昭和30年代（1955年）から甘蔗栽培が盛んに。

### リゾートホテル開設までの過程

1971年3月～9月末：長期早魃

1971年9月：大型台風28号

} 出稼ぎのため島を離れ、島の人口激減

1973年 「小浜島結成会」が結成され、本土の企業に対し積極的な誘致活動を実施。

同年 島の約4分の1の面積150ヘクタールの土地を株式会社ヤマハに売却

1979年 リゾートホテル「はいむるぶし」開業 以後、来島者数は年々増加

2001年 「南西楽園」（資本はユニマツト）開業

2011年 星野リゾートが「南西楽園」の経営受託（2017年3月末日まで）

<sup>2</sup> 主に2002年—2004年に行った調査データに基づいている。

### リゾートホテル開設から 30 年経過後の生活 (2002-2004 年頃)

ホテルで働く従業員数は少なかった・・・島人の従業員数：10 人（正社員男性 4 名、契約社員 6 名）  
観光事業の展開・・・クリーニング業や運送業を起業し間接的に利益を享受。民宿の数は変わらず。

土産物の商品開発もわずか、ホテルとの提携事業は 1 軒のみ。

小中学校の維持が可能に・・・ホテルで働く従業員の子どもが就学

移住者との関係性・・・互いに双方の間にある距離感を尊重しているかのようにみえる。

産業別就業者数（2000 年）・・・253 人（第三次産業 156 名（61%）、農業従事者数は 77 人）

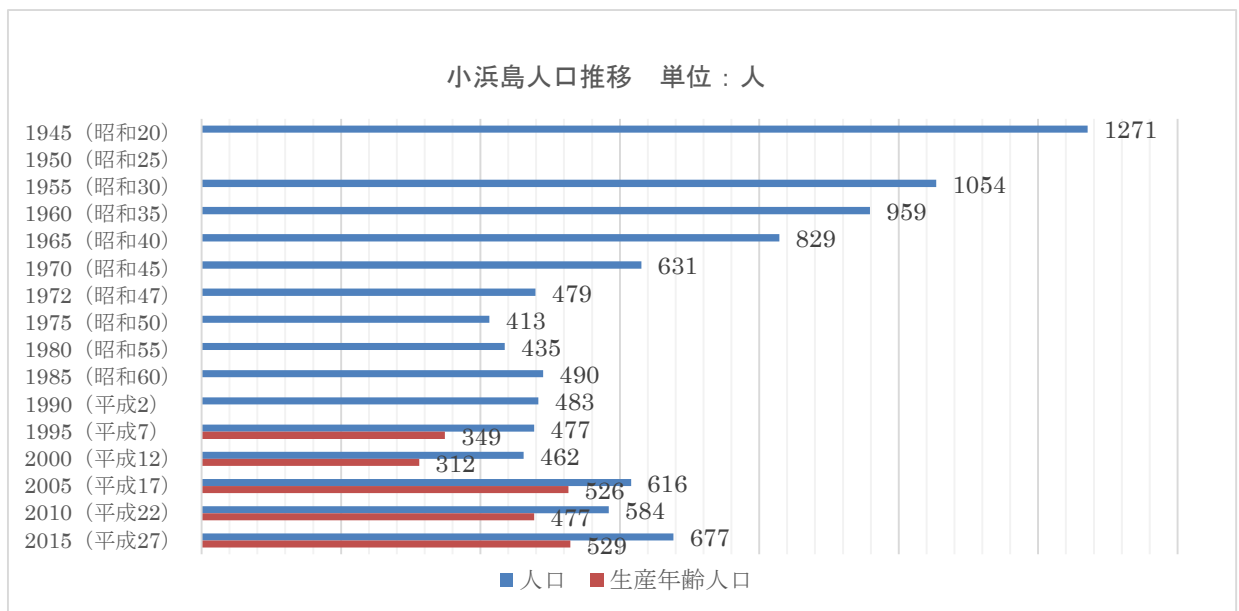
リゾートホテル誘致から 30 年経過後も農業が主産業  
（ただし、2015 年の国勢調査では 40 人に減少）

問：小浜島は沖縄全土でも稀に見る「行事の島」と称され、1 年のおよそ 6 分の 1 が何らかの形で年中行事に費やされている。他の沖縄のシマにおいては、年中行事の簡素化が進んでいるにも係わらず、それが維持されているのはなぜか。

- ・「豊年祭」の存在
- ・年中行事の継続により、島人の権威が示されている。（=戦略的本質主義）
- ・大きな行事（祭）では、島人は幼少時より段階的に様々な儀礼における役割を担わされ、また、それらの祭りは対抗構造で行われるために、（動機の面においても）、シマの社会システムから逃れにくくなる（加賀谷 2005）。

→小浜島における行事の継承は、島に出自を持つ者に強いアイデンティティを生じさせ、U ターン者の増加、シマの活性化に寄与している。地域社会と観光業とのかかわり方も多様であり、資本への従属のみでその是非は議論できない。

2007 年 「盆（ソーラ）」「結願祭（シチィ）」「種子取祭（タナンドゥル）」の芸能が  
国の重要無形民俗文化財に指定



出典・竹富町史編集委員会 2011『竹富町史 第三巻 小浜島』竹富町役場 p.48～50(1945 年～2010 年まで)

・竹富町-竹富町地区別人口動態票

[https://www.town.taketomi.lg.jp/administration/toukei/jinko/doutai/\(2019.1.31\)\(2015年のみ\)](https://www.town.taketomi.lg.jp/administration/toukei/jinko/doutai/(2019.1.31)(2015年のみ))

注：1950 年の人口については、出典元に記載なし。

表1 小浜島における祭祀集団と行事の関係

行事の性質	行事名			祭祀集団の形態
キンザル	四大行事	三大行事	ソーラ	南部落・北部落
			シチイ	
			ポール	アカシ・クヌシ
		種子取祭	六つのヤマニンジュ	
ニンガイ	ウニンガイ、ムネー等			(氏子組織)

表2 2002～2003年度の小浜島の年中行事

	旧暦	新暦	十干	十二支	祭祀名	日取りの要点	
1	5月25日	7月13日	みずのえ		ポール (豊年祭)	ハツコース(初起し)	「大願い」40日後に行う
	6月15日	8月2日	みずのえ			ワーンポール	
	6月16日	8月3日				ナビンドウ ポール	
	6月17日	8月4日				イローラポール	
2	7月7日	8月15日			ソーラ (盆行事)	ナンガソーラ	旧暦7月7日
	7月13日	8月21日				ソーラ(ウンケー)	旧暦7月13日から始まる
	7月14日	8月22日				ソーラ(中日)	
	7月15日	8月23日				ソーラ(ウークイ)	
	7月16日	8月24日				ドウハンダニンガイ	
	7月17日	8月25日				獅子舞・自己紹介	
	7月18日	8月26日				清掃活動	
3	8月5日	9月11日	みずのえ	うま	アーラミンツウ(新水)		
4	8月5日	9月11日	みずのえ	うま	ハツニンガイ(初願い)		
5	8月6日	9月12日			ハツムネー	ニンガイの翌日	
6	8月22日	9月28日	つちのと	み	シチイ (結願祭)	スクミ	己の亥
	8月23日	9月29日				ショウニツ	
	8月24日	9月30日				トウドウミ	
	8月25日	10月1日				タマスコーサミ	
7	9月9日	10月14日			9月9日		
8	9月16日	10月21日	みずのえ	いぬ	種子取祭(御嶽参り)		
	9月17日	10月22日			農事懇談会(種子取祭)		
9	10月	11月11日	みずのと	ひつじ	十月パイ	10月最初の癸の日	
10	10月16日	11月30日	みずのえ		十月タカビ		
11		1月1日			正月		
12	12月7日	1月9日			苗の願い		
13	12月8日	1月10日			ムネー	ニンガイの翌日	
14	1月		みずのえ		アーラミンツウ(新水)		
15		1月16日			十六日祭		
16	1月		みずのえ		ハツニンガイ(初願い)		
17	1月				ムネー	ハツニンガイの翌日	
18	2月		みずのえ		二月パイ	2月最初の癸の日	
19	2月		みずのえ		二月タカビ		
20	3月		みずのえ		ファーバニンガイ(草葉願)		
21	3月				ムネー	ファーバニンガイの翌日	
22	4月9日	5月9日	みずのえ	うま	ウニンガイ(大願い)		
23	4月10日	5月10日	つちのと	ひつじ	ウームネー(大ムネー)	大ニンガイの翌日	

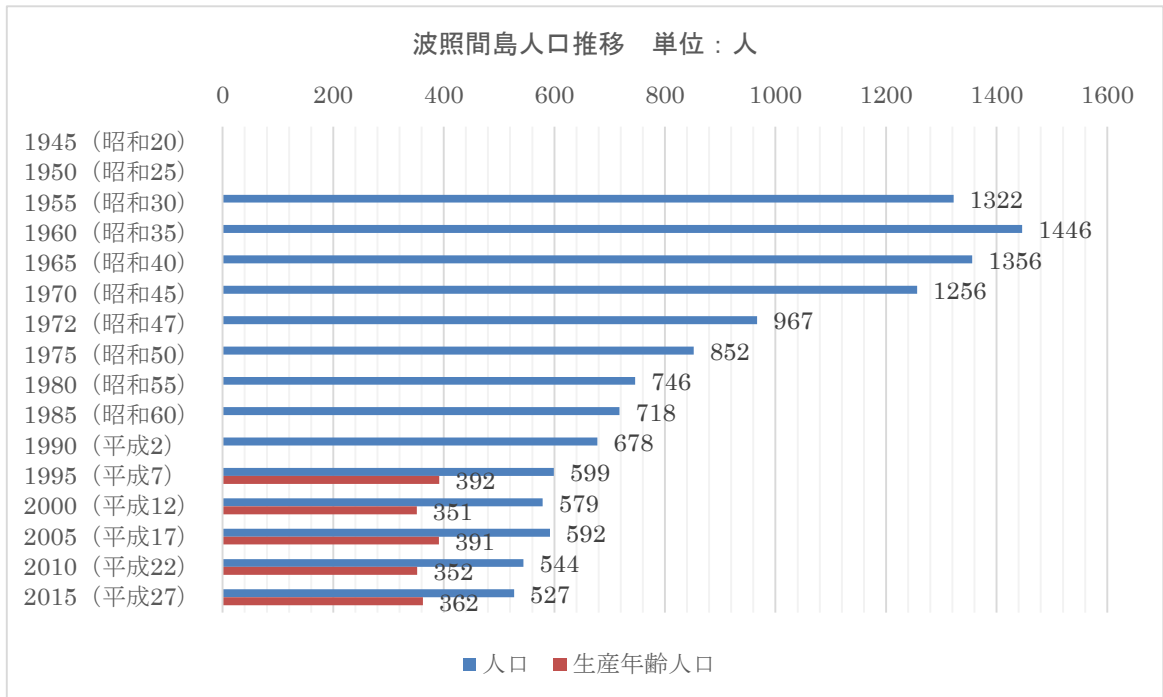
(c)2003Kagaya, ochanomizu AC

- 豊年祭
- ユーニンガイとムネー
- アーラミンツウ
- 2月・10月パイ(氏子の健康願い)
- 盆行事
- 結願祭
- 種子取祭
- タカビニンガイ(島人の健康願い)

### 3 すむづれ<sup>3</sup>の島ー波照間島の現在

人口：499人、世帯数222、高齢者率 29.5%（2010年国勢調査）

生業：農業、観光業



出典：人口推移 竹富町史編集委員会 2018 『竹富町史 第七巻 波照間島』 竹富町役場 p.61～67  
 生産年齢人口 沖縄県-八重山総覧（平成22年・平成23年）  
 沖縄県-離島関係資料（平成30年1月）（2005年・2010年に使用）  
 国勢調査（平成12年・平成7年）（当該年に使用）  
 注：1945年、及び1950年の人口については、出典元に記載なし。

#### ◆すむづれの家

2000年以前 人目につかないよう裏座に寝かされる高齢者。「焼かれるのが怖い！」

2000年 介護保険法施行

2001年 すむづれの家開設

町の委託事業としてデイサービス（週5）と配食サービス（週2）が開始（介護保険法とは無関係）、住民組織が運営母体

・2004年 NPO法人化

・2013年 介護保険法制度上の小規模多機能型介護事業所<sup>4</sup>に刷新

→島をめぐる表象や言説を通じて実体を作り出されている。（再帰性）

#### すむづれの家の理念

「いちばぎん（いつまでも） べすまなおりち（この島で） むっさーし（楽しく） しわありおらぬよう（安心して） すまえるんね（暮らせる） しがねんしおすんど（お手伝いをします）」

<sup>3</sup> すむづれとは、心をひとつに、心をそろえるといった意味を持つ。島人の気質を象徴する言葉として再発見され、町史のタイトルにまで用いられるようになった（竹富町2018）。

<sup>4</sup> 介護士や社会福祉士等の資格は問われない。

#### ◆理事会およびスタッフの構成（2018年）

- ・理事会（理事長1、副理事（施設長）1、理事6、監事2）  
理事に看護師、元保健師、元社会福祉協議会会長を含む（うち島外出身者5）
- ・スタッフ（施設長1、ケアマネ1、他10）  
→Uターン3、島嫁4、Iターン1を含む

#### ◆小規模多機能型在宅介護施設に移行後の変化

##### 「地域還元」「地域への再分配」という理念の先鋭化

##### i) 食材の仕入れ先

5つの集落の共同売店<sup>5</sup>から平等に食材を購入するという理念が強化された。

##### ii) 売店の設置

船の待合所に売店を設置し、高齢者をはじめとする島民（利用者家族を含む）から特産品、民芸品、農作物等を買上げ販売する。また、週3回2名の高齢者が販売員として店頭立つ。高齢者への給与（時給750円）も付与される。

##### iii) 地域通貨の導入

収入源の多角化に伴い収益の増加→2014年より法人税の課税を回避する目的もあり、学校や保育所、青年会、婦人会に寄付をした他、地域通貨を導入。

- ・通貨は島内の共同売店の他、土産物店や食堂等で使用可能。
- ・Xの会員であるか否かを問わず、65歳以上の全ての高齢者（介護保険料を徴収されている人々）に1人1万円強の通貨が配布。利益の再分配という目的の他に、引きこもりがちな高齢者の外出を促す目的もある。

##### （小さなまとめ）

人が集まる要件として「南国」イメージの影響は否定できないが、すむづれの家は確かにUターン希望者や島での生活を希望する島外出身者に雇用の場を提供し（ケアの循環）、シマの外縁の拡張に貢献している。

## 4 まとめにかえて

離島社会が本土の資本に否応なく包摂され周辺化されていく中で、いずれのシマにおいても守ろうとし、今でも守り続けようとしているのは民俗文化、景観、一次産業といったシマの基盤であり、それらを守ってきた人そのものである。特に、波照間島では民間の介護事業所参入に期待せず、自前で介護を提供することで、シマに生きてきたブヤー、パーとこれから生きていこうとする人たちの生命・生活を守っている。国から特別な補助を受けずとも現行の法制度を活用した地域起こしの実践例だといえよう。

地域住民が何を守ってきて、何を守ろうとしているのかへの着目は、人々を分断する政治的力に抗う術を提供してくれる（松村 2018）。今後も離島のシマに生きる人々の多様な生に寄り添い、その営みを愚直に記述し、多声的な言説空間に提起していきたい。

<sup>5</sup> 共同売店は世帯出資によって設立され組合直営で運営されている売店である。五つの集落に一店舗ずつ1951年から1967年にかけて設立された（竹富町史編集会 2018：647-648）。1戸1口出資し、余剰金がある場合には配当金が出る。県下では沖縄本島最北部の国頭村奥にて戦前に創設されたのが最初の共同売店である。

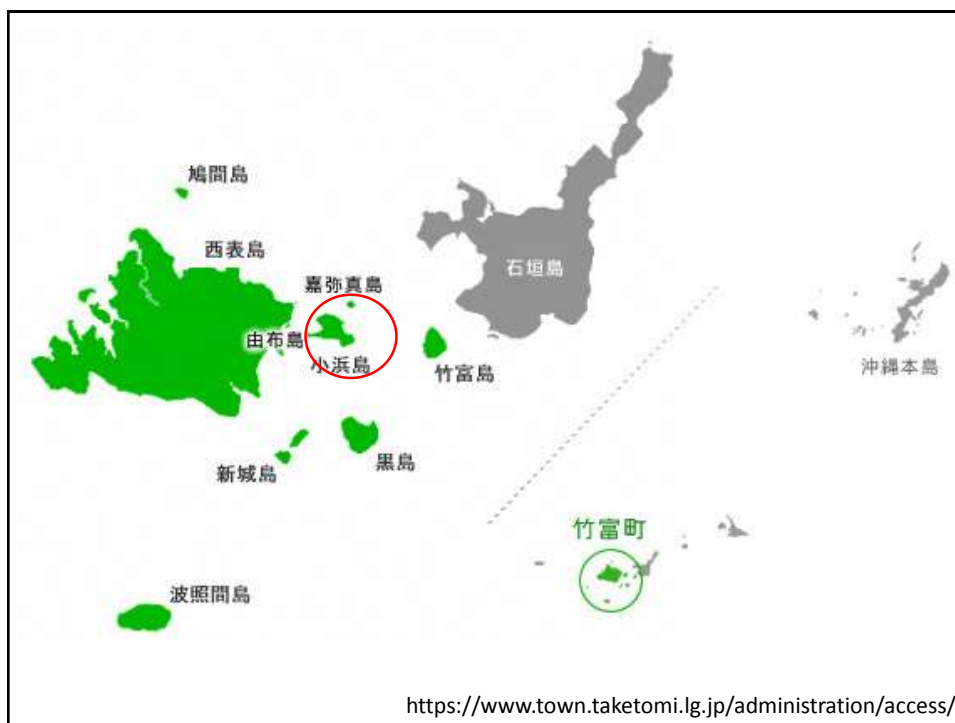
## 【参考文献】

- 池田哲夫 2010 「佐渡と宮本常一—地方の民俗研究者との交流—」『佐渡・越後文化交流史研究』10 : 15-23
- 岩本通弥 2012 「民俗学と実践性をめぐる諸問題—「野の学問」とアカデミズム」岩本通弥・菅豊・中村敦編著『民俗学の可能性を拓く』、青弓社
- 石原俊 2011 「<島>をめぐる方法の苦闘：同時代史とわたりあう宮本常一」『現代思想』vol.39-15 : 134-157
- 加賀谷真梨 2005 「沖縄県・小浜島における生涯教育システムとしての年中行事」『日本民俗学』242 : 35-63
- 2014 「ジェンダー視角の民俗誌—個と社会の関係を問い直す」門田岳久、室井康成編『<人>に向きあう民俗学』森話社、156-187 頁
- 2019 「再分配制度としての介護保険法とコミュニティの再編」浜田明範編『再分配のエスノグラフィ—経済・統治・社会的なもの』悠書館（印刷中）
- 門田岳久 2017 「離島性の克服：宮本常一と反転する開発思想」『立教大学観光学部紀要』19 : 23-37
- 坂野徹 2011 「「寄り合い」と朝鮮戦争：宮本常一の九学会連合対馬調査をめぐって」『現代思想』vol.39-15 : 170-189
- 2012 『フィールドワークの戦後史：宮本常一と九学連合』、吉川弘文館
- 杉本久未子・藤井和佐編 2012 『変貌する沖縄離島社会—八重山にみる地域「自治」』、ナカニシヤ出版
- 竹富町史編集委員会 2011 『竹富町史 第3巻 小浜島』、竹富町役場
- 竹富町史編集委員会 2018 『竹富町史 第7巻 波照間島』、竹富町役場
- 崔仁宅、石川浩之、森雅文、渋谷研 1996 「奄美・沖縄はどう語り得るか」『民族学研究』61-3 : 467-481
- 松村正治 2018 「自衛隊配備から考える島の未来の選び方」関礼子・高木恒一編著『多層性とダイナミズム：沖縄・石垣島の社会学』、東信堂
- 宮本常一（1955）1969 「おくれをとりもどすために」『宮本常一著作集4』、未来社
- （1958）1969 「島に生きる」『宮本常一著作集4』、未来社
- （1972）1986 「調査地被害」『宮本常一著作集31』、未来社
- ジェームズ・クリフォード、ジョージ・マーカス編 1996 『文化を書く』、紀伊國屋書店

# 行事の島—小浜島



[www.kohamajima.net](http://www.kohamajima.net)



# 小浜島 7.85km<sup>2</sup>



人口：447名(2000)→652名378世帯(2005)→585名344世帯(2010) 国勢調査  
高齢化率27.6%(2010)

産業：253名の産業別従業者数のうち 第三次産業61%(2000)→73%(2010)  
農業従事者数 68(1995)→77(2000)→69(2010) サトウキビと肉牛

観光：民宿5つ、ホテル2つ、2001年「ちゅらさん」の舞台に  
観光客数：43282(1995)→165987(2005)→111490(2011)

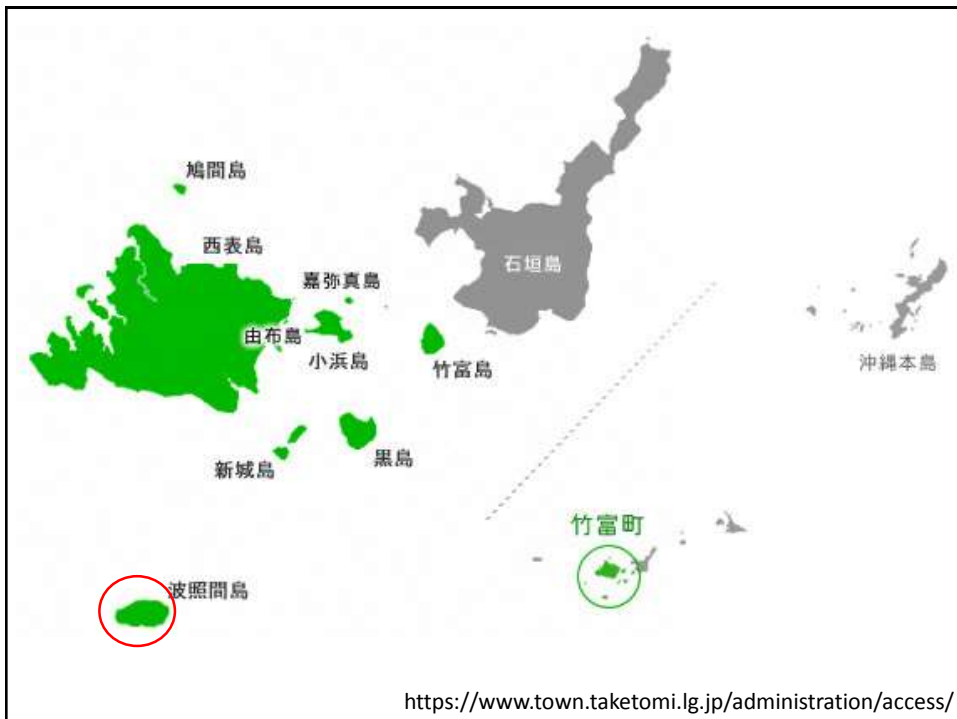




# すむづれの島—波照間島



<http://www.haterumajima.net/>





## 波照間島

人口 544名、世帯数222  
高齢化率 29.5%

農業92人、飲食・宿泊43人  
(2010年国勢調査)  
農業49人、飲食・宿泊33人  
(2015年国勢調査)



## すむづれの島—波照間島

### ■2001年 すむづれの家開設

- ・2000年ワーキンググループ発足
- ・町の委託事業として週5日デイサービスと週2回の配食サービスが開始(介護保険法とは無関係)
- ・住民組織が運営母体
- ・利用料300円を徴収
- ・2004年5月に  
NPO法人化



## (調査報告) 泉地区の民俗調査から

【新潟大学人文学部 民俗学研究室】

新潟大学人文学部 准教授 いじま やすお 飯島 康夫

新潟大学人文学部 4年 かわぐち ゆうな 川口 由菜

### 【飯島 説明】

こんにちは。人文学部の民俗学研究室の一員ということで、調査報告をさせていただきたいと思います。報告するのは学生ですが、その前に一言、民俗学研究室の活動について改めてお話ししたいと思います。

民俗学というのは、生活文化を対象にして、その歴史や意味を、フィールド調査を通じて明らかにしていく学問です。新潟大学民俗学研究室では、学生の教育を兼ねて、毎年、新潟県内、あるいは隣接地域の一箇所を調査地として選定し、学部2年生から4年生、大学院生と教員で地域にお邪魔して、その生活文化について様々な観点からお話を聞き、記録するという活動を二十数年行っています。今年度で26箇所の地域を訪れており、それらを報告書にまとめて24冊刊行しています。25冊目になる平成29年度の調査に伺ったのが、佐渡の泉地区でした。

調査にあたりまして、泉地区の皆さんや、昨年刊行されました「佐渡の国・泉の人物誌」の編さん委員の高橋委員長、北見事務局長、畠山副委員長を中心とした方々に大

変お世話になりました。夏と冬、色々な泉の民俗についてお話を伺うことができました。今日お話しするのはその内のごく僅かです。泉は大変歴史が古く、近世にはいくつもの村落が集まって出来ているということで、調査初心者の学生にとっては、なかなか手ごわい広い地域でした。それだけに非常に興味深い民俗文化があったわけですが、今日はその中から信仰の分野ということで、荒貴神社と泉地区の堂について、学部の4年生である川口由菜から報告をさせていただきます。

金井地域は、中央南よりを旧国道350号が横断し、道路沿いに市街地を形成しています。国道の南は国仲平野の一部をなす水田地帯で、国道北の大佐渡山地に続く段丘上に泉の集落が点在しています。配布資料5ページ目(本誌36ページ)に泉の地図があります。周辺の山を含めると、これよりも広い地域が泉となっています。泉の平成30年1月末現在の人口は837人、世帯数317世帯です。泉全域を泉、あるいは泉区と呼んでいて、泉第一から第五の集落で構成さ

れています。各集落はさらに組単位で分かれていて、泉第一は立野組と当野平組に分かれています。泉第二集落は、下矢馳組、牛込上組、牛込下組、牛込東組、牛込西組に分かれています。

## 【川口 発表】

新潟大学人文学部 4 年の川口由菜と申します。今回、泉の調査では人々の信仰について担当しました。今回の調査報告では、泉地区の中心である荒貴神社の例大祭についてと、泉内に点在するいくつかのお堂についてお話ししたいと思います。

まず泉地区の概要についてお話ししたいと思います。泉は佐渡の中部旧金井町の南西部に位置し、西は旧佐和田町、東は南流する藤津川を境に中興と接している農業地域です。泉第三集落は、岩野組、荒貴組、畑田下組、畑田上組、町組、泉第四集落では、嶋下組、嶋中組、嶋上組、外城組、野方組、五丁弓組、西河内下組、西河内上組で構成されています。泉第五集落は新しい家が多く、6つの班に区分されています。

続いて、荒貴神社についてお話ししたいと思います。泉第二集落に所在する旧村社であり、祭神はスサノオノミコトとオオナムチノミコトです。氏子は泉集落ほぼ全域にあたります。境内には、鳥居、狛犬、石灯籠があり、社殿に向かって左側の木造建物内には木製の薬師如来像が祀られています。この薬師如来像は順徳上皇が持参したものであるといわれています。また、神社社殿

の後ろ側には御旅所があり、そこには神輿を置く石の台座と、2本の松が植えられています。

荒貴神社の氏子の中には下社家（しもしゃけ）と呼ばれる家があります。下社家は、元々お宮の神田で神社に奉納する米を作っていた家であったといわれています。かつての祭礼の際は、それぞれ祭礼準備の役割が決まっていて、神主および下社家たちによって祭礼の一切の事がまかなわれていたそうです。下社家は今3軒ありますが、元々は6軒あったとされています。現在、下社家は、祭礼の際に、流鏝馬の射手の衣装作りや、射手の着付け、注連縄の準備などを行っています。

また、各集落から2名ずつ選ばれた氏子総代が全部で8人います。神社総代は祭礼の準備、運営神社倉庫の鍵の管理など、神社に関する様々な仕事を行います。

次に、荒貴神社の例大祭についてお話ししたいと思います。荒貴神社の例大祭は8月7日に行われています。前日8月6日は、祭礼準備として宵宮があります。当日、8月7日の午前中には、神社で神事式、その後集落全体を回る神輿渡御が行われ、お昼に直会があり、そのあと夕方に流鏝馬と鬼太鼓奉納が行われています。それでは各項目について詳しく見ていきたいと思っています。

まず、宵宮についてです。祭礼前日、宵宮として神主や氏子総代、集落長、下社家によって祭礼準備が行われます。準備は午前中から始まり、昼食は神社拝殿内でとら

れます。午後 3 時頃になると御神木となる松を山へ切り出しに行きます。御神木を切る様子がこちらです（映像上映）。切ってきた御神木となる松は、拝殿のかしらの両脇に立てられ、白、青、黒、紫、赤の布を飾りとして松の上部にくくりつけられます。その後、午後 4 時半頃になると、神主による祝詞奏上、射手による玉串奉納が行われます。それが終わると、射手の流鏝馬の練習が行われます。射手は例大祭当日の衣装を着て、馬に似せた軽トラックに乗り、本番のように的を射る練習を行います。

次に、神事式についてお話します。神事式は祭礼の当日、午前 9 時ごろから神社の拝殿内で行われます。神事式の内容については、神主の祝詞奏上、巫女による神楽、玉串奉納などが行われます。その神楽の様子がこちらです（映像上映）。神輿渡御の前には鈴と扇を持って神楽が舞われますが、この後の神輿渡御後では鈴と榊を持って舞っています。このように神事式が行われ、それが終わると御神体の御幣が宮司によって神輿に移され、集落全体を回る神輿渡御が行われます。神輿渡御については、後ほど詳しくお話したいと思います。

次に、流鏝馬についてです。祭礼当日、夕方 5 時頃になると、神社で流鏝馬が行われます。昭和 40 年代頃までは馬に乗って行われていましたが、私たちの調査時点では軽トラックを馬に見立てて流鏝馬を行っていました。流鏝馬の射手は、小学校へ通う前の泉に住む男子から、3 名ほど選ばれます。流鏝馬の的は 2 つ用意されていて、社殿を

正面にした際、左側に設置されています。

続いて、鬼太鼓が行われます。流鏝馬終了後に鬼太鼓が奉納されますが、まず 1 回目の鬼太鼓は社殿に向かって舞われます（映像上映）。1 回目の鬼太鼓が終わると、神社の参道に安置されていた神輿が、神社裏の御旅所まで運ばれます。神輿が御旅所につくと、神主による祝詞奏上、神楽の奉納が行われ、御旅所の方で 2 回目の鬼太鼓が行われます。その様子がこちらです（映像上映）。

ここで、神輿渡御について詳細をお話します。神輿渡御は午前中に行われます。平成初期は青年会が神輿を担いでいましたが、若者の減少により、現在はトラックによって神輿が運ばれ、泉全域を回っています。神輿渡御では、神輿を先導してお囃子を流す車、その次に神輿、その次に宮司や巫女を乗せた車の順番で列を成し、五穀豊穰や家内安全を願い、泉区内を神輿が回ります。

神輿渡御の順路を地図（本誌 36 ページ）で示します。まず神輿は荒貴神社を出発し、第一集落の立野堂前で一度止まります。立野堂前では集落の人が神輿の前に集り、神輿に備えられた賽銭箱に賽銭を入れ、拝礼をします。そして、その場で神主による祝詞奏上、神主たちによる笛や太鼓の演奏のもとで、巫女による神楽が舞われます。立野堂前の様子がこちらです（映像上映）。ここで神楽が舞われた後に、神輿は立野堂から上を回って、第一集落にある小坂堂にとまります。こちらでも同じように、集落に

人がお賽銭をしたり、拝礼をしたりした後に、神楽や祝詞奏上が行われます。神楽の様子がこちらになります（映像上映）。このように、立野堂や小坂堂の前では、神楽や祝詞奏上が行われます。小坂堂のあと、神輿は荒貴神社の方に戻り、神社の近くの下社家のお宅に止まります。そこでも同じように、祝詞奏上と神楽が行われます。この後も、同じように泉集落内を回っていきます。最後に寺正法寺で祝詞奏上や神楽が行われます。その後、神輿は、荒貴神社に戻ります。神社到着後、神輿は神社の参道に安置され、流鏝馬や、1回目の鬼太鼓終了後に、神社の裏にある御旅所まで運ばれます。この際の神輿渡御の様子がこちらです（映像上映）。神輿渡御の行列の順番は、まず弊束、鉾、青鬼面、赤鬼面、供物、笛 2 人、榊、巫女、神輿、鬼太鼓組という順番で神輿が御旅所まで運ばれます。そして 2 回目の鬼太鼓が行われます。

このように、神輿渡御の経路や、神輿が止まる場所というのは、泉という集落にとって重要な意味を持っている道や場所になっています。中でも泉集落に点在するお堂は、神輿の止まる場所や、神輿渡御の経路になっていることが多くあります。そこで、次に泉のお堂について詳しくお話したいと思います。

泉の第一集落、第二集落、第三集落にはお堂がそれぞれ 2 つずつあります。第四、第五集落の地域には、1 つずつお堂が存在しています。

まず、泉第一集落にある立野堂についてお話します。場所は地図の上部にあります。立野堂は、泉第一集落の立野にあるお堂で、本尊は地蔵菩薩、祭日は 8 月 24 日です。平成 16 年には堂の隣に公民館が併設されました。現在、堂は立野組の 12 軒で管理をしています。また、立野堂では、年に数回 10 人ほどのお年寄りが集って念仏を唱えています。念仏の日程ですが、3 月 9 日に山の神念仏が行われ、3 月 15 日には御釈迦様、7 月 15 日に虫供養、8 月 23 日に宵祭り、8 月 24 日に本祭り、そして 3 月 1 日にも念仏が唱えられています。

次に、同じく泉第一集落にある小坂堂についてお話します。小坂堂は泉第一集落の当野平にあり、当野平組の 12 軒で管理されています。立野堂とともに平成 16 年に堂の隣に当野平公民館が併設されました。小坂堂でも同じように、年に 3 回ほどお年寄りが集まり、念仏を唱えています。2 月 28 日には鉦切らず、3 月 15 日には御釈迦さん、8 月 20 日には堂祭りがあり、この日程で年に 3 回念仏を唱えています。

続いて、泉第二集落にある観音堂についてお話します。洞泉寺を正面とした際の左側に位置しています。本尊は千手観音で、祭日は 8 月 18 日です。牛込の上組と下組の 20 軒ほどで管理しています。15～20 年前までは毎月 18 日に堂に集まり念仏を唱えていましたが、その後は正月の 1 月 8 日と観音様の祭りである 8 月 18 日の年 2 回集まることになりました。しかし、平成 27 年にその習慣も途絶してしまい、現在では念仏

を唱えに集まることはなくなりました。念仏を唱えていた頃の参加者は、牛込上組と下組、また牛込西組の修軒ほど数軒でした。

続いて、泉第二地区にある山居阿弥陀堂です。山居阿弥陀堂は、明治のはじめに廃寺になった和泉山居涼風山松林寺の跡です。慶長8年、弾誓上人の開基と伝えられています。阿弥陀堂は建物や本尊の老朽化が進み、何度か修繕を試みましたが、建物を維持するには個人負担が大きいということで、平成25年に取り壊してしまいました。現在、こちらのお堂があった場所には、壊されたお堂の残骸やコンクリートでできた地蔵堂と、いくつかの石造物が残るだけとなっています。堂の管理は、牛込東組、西組の23～24軒で行っていました。堂があったころは、1月5日、1月17日、8月22日、12月10日の4回、念仏が唱えられていました。

続いて、泉第三集落になる得心堂についてお話しします。得心堂は、周辺にある荒貴組と岩野組で管理されています。堂の中には御釈迦様の掛軸や仏像があります。以前は年に数回お堂に集まり、念仏を唱えていましたが、5～6年前から年に1回、7月24日に集まるだけになりました。この日には正法寺の檀家の人が集まって、現在でも念仏を唱えています。

続いて、第三集落にある十王堂についてです。十王堂は泉第三集落の北野神社の隣に位置しています。北野神社の隣にあるため、人々からは天神堂と呼ばれています。堂の管理は、畑田組、町組、五丁弓組の3つの組の一部で行われています。現在では

年に3回、1月5日、3月6日、8月25日に堂に集まり念仏を唱えています。

続いて、泉第四集落に位置する野方堂についてです。野方堂は旧泉福寺という寺で、明治の廃仏毀釈により廃寺となり、堂となりました。祭日は8月24日になっています。こちらは、野方組と外城組で管理しています。以前は年6回、念仏を唱えるためにお堂に集まっていたのですが、現在は年2回のみ念仏を行っています。その2回というのは、1月5日の御祈祷念仏と8月24日の例祭になります。この他に10年ほど前からやらなくなってしまった念仏が4つほどあり、2月に百万遍念仏、3月15日に御釈迦様開き、3月19日に鉦切らず、7月に虫供養ということで、4回ほど現在は行われていない念仏がありました。

最後に、地蔵堂です。地蔵堂では、現在念仏を唱えるために集まるということはありませんが、かつては十王堂を管理する組と同じ地域の人が集まって念仏をあげていました。このお堂は別の場所にあったとされていて、冬の雪が吹雪いている頃には、道しるべの様な存在として地域にあったといわれています。

このように、泉には沢山のお堂が存在しており、それぞれが周辺の複数の組によって管理され、その地域の人が集まる場所になっています。堂は泉集落の人々にとって集落の中心で、なくてはならない場所になっているという事が、今回のお堂の調査をして分かりました。

以上で調査報告を終わらせていただきます。今回の発表は、泉の調査結果の信仰の神社とお堂という一部でしたが、他の多くの学生と協力し、泉の民俗文化を調査しました。その報告書が今年発行されるので、ご覧いただければと思います。本日はご清聴ありがとうございました。

### 【飯島 解説】

今回、調査した内容のうち何を報告しようかと非常に迷いました。調査では、少なくとも泉の方にとってはごく当たり前の話ばかりを聞いています。私たちの民俗調査というものは、生活の歴史といってもそう古い時代まで分かるわけではありません。学生が聞いているのは、泉で行われてきたことを実際に経験した人たちの記憶にもとづく話で、調査ではそれを記録しています。しかし、これが研究の素材になってくるのです。今回の報告では、それをどのような形で報告したらよいかと考えました。

そこで、報告の題材として、泉の人にとっては当たり前であるけれど、他の地域の人にはなかなか見る機会がないというような事象を取り上げました。泉の人は当たり前だから記録もしませんが、それをあえて記録することで、後でなにか意味があるものだと分かってくるかもしれないものとして、神社のお祭りと、それに伴う神輿渡御、そしてお堂を題材として選ばせていただきました。これらのテーマは泉にとって歴史的に意味があるものですが、民俗調査だけで

はなかなかその意味が分からなかったものです。

昨年に『佐渡国泉の人物誌』という泉の歴史を記した素晴らしい本ができました。この本に記載されている歴史的事実と、今回の民俗調査の結果を照らし合わせて見ると、泉という地域の歴史が、民俗に反映されているという事が分かってきました。それが「神輿渡御の道」と「お堂」です。それを「地域社会の領域と中心」というように表現しました。

神輿渡御というものは、地域の氏神様が、祭りに際して自分の領(うしは)く地域を回るわけです。その回る範囲は、地域社会の精神的なまとまりを象徴しています。道によって領域を示しているのです。渡御だから道なのは当たり前だろう、と思うかもしれませんが、広い面積を持った地域、氏神の領域を、道という象徴的な線で表しているのです。つまり、道というものの範囲を見ると、ムラという社会的まとまりの範囲が分かるのです。

地籍上、泉の範囲は、神輿渡御の範囲よりも、もっとずっと広いのですが、神輿は山の中の地籍の境にまで行くことはありません。神輿が回るのは大抵人家のあるところで、そこまでがある種の精神的な地域社会のまとまりの範囲であるということが分かります。今の主要な道は車で回りやすいように真っ直ぐにしたり、拡張したりしますが、そのように便利な道があったとしても、神輿渡御の時には地域にとって歴史的に重要な意味を持っていた道が選ばれてい



ます。国道はあまり通りませんし、黒木御所の前の広い道路も通っていません。それらの道よりも、かつて「荒貴道」といわれていた道や、塩買い道などの古い道の一部を、神輿はわざわざ通ります。つまり、集落の中の細い道で、今となっては車が通るには細い道ですが、歴史的に生活文化の中心だったような道を選んで通っています。嶋坂など、神輿の通る道が曲がりくねっているところもありますが、そのような道がかつては重要な道だったのです。

神輿渡御の順路を見ることによって、かつての道の歴史的痕跡を辿ることができません。もちろん、現在ではかつての道が無くなってしまい、通れなくなっている場所もあるかもしれません。今回の調査では、神輿渡御の道の重要性が若干分かった程度です。このことから課題となると思います。

神輿が行く範囲というのは、先ほどの加賀谷先生のお話でいう「シマ」、つまりコミュニティのことであり、民俗学の用語ではムラとっています。神輿はそのような地域社会、さらにはその中のさらに小さいまとまり、加賀谷先生のお話にあった「組」や、組がいくつも固まった範囲を、あまねく渡御していく。つまり、それは氏神が領(うしは)く範囲なのです。そのとき、回って行くには、それぞれの地域の中の「中心」を通ることになります。そこに、往々にして「堂」が置かれています。

この堂というのも佐渡の方にとっては当たり前で、「堂なんていっぱいあるよ」と思

われるかもしれません。しかし、広く佐渡以外の地域を見ると、お堂そのものはあっても、お堂が信仰の中心であり、なおかつ地域社会の人々が集まるような社会的中心としての役割も果たしているところばかりではありません。

ずいぶん前ですが、人文学部で民俗学を専攻し、新穂の大野のお堂について卒業論文を書いた学生がいました。その論文では、地域のなかでお堂が、単に信仰として集まるのではなく、社会的な寄合を開いたり、あるいは作業場になっていたという形で機能しているあり方を明らかにしています。泉でもお堂はそのような存在になっていて、その後、お堂が公民館に移行していくということも見られます。ムラや組などの社会的まとまりの中心としての役割をお堂が果たしているのです。逆に言うと、お堂ごとのまとまりが社会のまとまりであり、お堂を管理している組織などを見ることで、その地域の社会的まとまりの範囲や歴史が分かってきます。

例えば、同じ牛込というムラの中でも、上と下で一つとか、西と東で一つとかという組み合わせでお堂を管理しています。あるいは、組を越えて何軒かで一つのお堂を管理していることもあります。宗教的な意味合いもあるとは思いますが、それだけでなく、生活文化、生活のつながりや付き合いなどの範囲によって地域の社会的まとまりが形成され、お堂がその中心になっているのだろうと考えられます。そして、それは泉や、それ以外の地域の、生活の歴史

というものと関わっているはずですが。そのような研究素材としての民俗調査の結果を、今ここで記録しておくことは、お堂自体が寂しくなっていく中で、意味があるだろうと考えています。

今回の泉での民俗調査の報告では、二つの素材を取り上げました。一つは、神輿渡御の道から地域の固有の歴史を探ること。もう一つは、さらに広げて、佐渡におけるお堂の意味を探ることです。今後は、年中行事やムラの組織などをまとめ、報告書を作成していきます。学生が調べたことですので、泉の人からすると「それは違うんじゃないか」などと感じられることもたくさんあると思いますので、ご指摘をいただきたいと思います。また、地域の方々も、ご自身の気づいたことを素材にして、自分たちの地域を考える一つの手掛かりにしていいただければ有り難いと思います。

長くなりましたが、これで人文学部民俗学研究室の調査報告を終わります。ありがとうございました。

### 【質疑応答】

#### ◆質問

このレポートが聴き取りなのか、泉の資料から抜粋されたものなのか、というレファレンスがあるといいなと思います

今日の発表は荒貴神社に絞ってお話しいただきましたが、他のメンバーは泉地区に

関してどのような調査をされたのか、もう少し詳細に教えて頂きたいと思います。

#### ◆回答（飯島）

今回は、基本的には学生たちが聞き書きによって調査したことが主です。加えて、地域の方々から文献等も教えていただきましたので、報告書を作成する段階では明記したいと思います。調査は平成29年8月と2月に行い、8月には5日間、2月は3日間調査させていただきましたので、調査報告書に明記いたします。

どのような調査をしたかということ、生活全般についてです。まずは、地域の概要、自然景観、水の利用、自然をどのように使ってきたか、どういうところも位置しているかという事を説明します。次に、村落の様々な区としての組織や、組ごとのつながり、そのような寄合について説明します。そして、家族や親族などの社会的なつながり、着るもの、食べるもの、住むところ、農業を中心にした生業、年中行事や、生まれてから死ぬまでの人生儀礼、今日発表させていただいた信仰や、寺のことや俗信などを含めた信仰を、調査対象としています。それから、泉は伝説が豊富にあるので、既に発表されているものも多いのですが、地域の伝説。そして、鬼太鼓を中心としたいくつかの芸能、子どもの遊びなどもあります。生活文化全般に渡って調査しています。

#### ◆質問

我々の神社でも、かつて神楽などを舞っ

ていましたが、後継者も教える人もいないため、絶えてしまいました。泉でも過去に神楽やっていたとのことですが、集落ごとでやっていたのでしょうか、神楽をやっている人たちが集落を回っているのでしょうか。そして、どのようにしたら集落で神楽を出来るかというアドバイスをいただければ有り難いです。

昔は能もやっていましたがそれもなくなり、神楽もなくなりました。何かしたいなという気持ちではいますが。

#### ◆回答（飯島）

大変難しい問題ですが、泉の神楽、巫女の神楽は、泉に伝承されているものではなく、神主さんたちの集まりの中で巫女舞をやろうと決まったと聞いています。ですので、泉独自のというものではありません。

廃絶してしまった神楽の復活は難しいですが、まだ覚えていらっしゃる方がいるうちに、所作などの記録を残さなければいけません。それがないと、「昔は神楽をやっていたね」だけで終わってしまいます。また、道具が残っているのであれば残しておくことだと思います。無くなってしまったものについては何とも言えませんが、神楽は様々な所から習ってくるものでもありますから、そういった面では復活の道はあるのかなと思います。そうは言っても、担い手がないとなかなか難しいところで、担い手の育成というのは大きな課題だと思っています。

## 泉地区の民俗調査から

新潟大学人文学部 4 年 川口由菜

### 1. 泉地区の概要

泉は佐渡中部、旧金井町の南西部に位置し、西は旧佐和田町、東は南流する藤津川を境に中興と接している農業地域である。中央南寄り国道 350 号が横断し、道路沿いに市街地を形成している。国道の南は国中平野の一部をなす水田地帯で、国道北の大佐渡山地に続く段丘上に集落が点在している。泉は平成 30 年 1 月末現在人口 837 人、世帯数 317 世帯の認可地縁団体である。

泉全域を泉、泉区と呼び、泉第一から泉第五の集落で構成されている。各集落は組単位で分かれており、泉第一は立野組と当野平組、泉第二は下矢馳組・牛込上組・牛込下組・牛込東組・牛込西組、泉第三は岩野組、荒貴組、畑田組、町組、泉第四は嶋下組・嶋中組・嶋上組・外城組・野方組・五丁弓組・西河内下組・西河内上組で構成されている。泉第五は新しい家が多く、1～6 班で区分されている。

### 2. 荒貴神社と祭礼

#### (1) 荒貴神社

泉第二集落に所在する荒貴（あらき）神社は旧村社で、祭神は素戔鳴尊（すさのおのみこと）、大己貴命（おおなむちのみこと）。氏子は泉のほぼ全域である。境内には鳥居、狛犬、石灯籠、また神社の社殿を向いにした際の左側にある木造の建物内に木製の薬師如来坐像が祀られている。

荒貴神社の氏子の中で下社家（しもしゃけ）と呼ばれる家がある。下社家は元々お宮の神田で神社に奉納する米を作っていた家であり、祭礼では様々な役割を担っていた。下社家は現在の人数は 3 軒であるが、元々は 6 軒であった。現在の下社家は祭礼の際、流鏝馬の射手（いて）の衣装づくりや射手の着付け、注連縄の準備などを行う。

また各集落から 2 人ずつ選ばれた氏子総代が全部で 8 人いる。氏子総代は祭礼の準備・運営、神社倉庫の鍵の管理など、神社に関する様々な仕事を行う。

#### (2) 荒貴神社例大祭

荒貴神社の例大祭は 8 月 7 日である。平成 29（2017）年 8 月 7 日（月）荒貴神社例大祭の日程は以下に記す。

- ・ 神事式 午前 9 時半～午前 10 時半頃
- ・ 神輿渡御 午前 11 時～午後 12 時頃
- ・ 直会
- ・ 流鏝馬 午後 5 時～午後 5 時半頃
- ・ 鬼太鼓奉納 午後 6 時頃～午後 7 時頃

### ○宵宮

祭礼前日、宵宮として神主や氏子総代、集落長、下社家により祭礼準備が行われる。

### ○神事式

祭礼当日、神事式が午前9時半頃から始まる。神主の祝詞奏上に続き、巫女による神楽、玉串奉納などが行われる。

### ○神輿渡御

神事式終了後御神体の御幣が宮司によって神輿へ移され、神輿渡御が行われる。平成初期（1990年代位）までは青年会が神輿を担いでいたが、若者の減少により行うことが出来なくなった。そのため現在神輿はトラックによって運ばれ、泉全域を周る。神輿渡御では、神輿を先導しお囃子を流す車、神輿、宮司や巫女を乗せた車の順で列を成し、人々の五穀豊穰や家内安全が願われる。

平成 29 (2017) 年 8 月 7 日 (月) 荒貴神社例大祭の神輿渡御の回り順は以下に記す。

荒貴神社発—立野堂—当ノ平堂—平兵衛宅前—与平家入口—旧作業所—長八宅入口—矢馳—権助宅入口—島集落入口—泉農協横—マツヤ前—犬猫病院—本光寺前—保育園—荒貴神社（本殿）

集落の人々は、各神輿がとまる場所（集落の中で少し広い場所）に集まり、神輿に備えられた賽銭箱へ賽銭を入れ、拝む。泉第一集落の立野堂、当ノ平堂（小坂堂）、泉第二集落下社家である平兵衛宅、正法寺保育園前では、神主による祝詞奏上、神職による笛・太鼓の演奏のもと巫女の神楽が舞われる。

### ○流鏝馬

午後5時頃から流鏝馬が行われる。昭和40年代頃までは馬に乗って行われていたが、現在では軽トラックを馬に見立てて流鏝馬を行う。軽トラックの前方には布を付け、後方にも馬の尻尾に見立てた布を付ける。軽トラックの荷台に置いた木製の馬の上に鞍を載せ、毛布を掛けた上に射手が乗る。射手は小学校へ通う前の泉に住む男子（長男）から3人選ばれる。流鏝馬の的は2つ用意されており、社殿を正面にした際左側に設置されている。

### ○鬼太鼓

流鏝馬終了後、鬼太鼓が奉納される。1回目は神殿に向かい1組の鬼太鼓が舞われる。その後神輿が御旅所まで運ばれる。その際神輿渡御の行列の順番は、幣束、鉾、青鬼面、赤鬼面、供物、笛二人、榊、巫女、神輿、鬼太鼓組、である。神輿が御旅所に着くと、神主の祝詞奏上、巫女による神楽の後、神輿に対して2回目の鬼太鼓が舞われる。

### 3. 泉地区の堂

#### (1)立野堂

立野（たての）堂は泉第一集落の立野にある堂で、本尊は地蔵菩薩(延命地蔵)、祭日は8月24日である。平成16年には堂の隣に公民館が併設された。現在堂は立野組の12軒の家(元は22軒)で管理している。立野堂では年に数回10人ほどのお年寄りが集まって念仏を唱えている。以下、その日にちである。

- ・3月9日 山の神念仏（山の神に念仏を唱える。）
- ・3月15日 御釈迦様（御釈迦様に念仏を唱える。）
- ・7月15日 虫供養（田んぼに一番水がなくなる時期であるので、雨乞いの意味で仏を唱える。また稲につく虫を払う意味も込められている）
- ・8月23日 宵祭り（前夜祭）
- ・8月24日 本祭り（地蔵堂の祭日。提灯を作って堂の前の道に吊る。女性は堂内で念仏をし、男性は堂の前で宴会をする。）
- ・3月1日 念仏（ここで1年が終わり、次の1年が始まる。）

#### (2)小坂堂

小坂（こさか）堂は泉第一集落の当野平にあり、当野平組の12軒の家で管理をしている。立野堂とともに平成16年に堂の隣に当野平公民館が併設された。小坂堂では年に3回お年寄りが集まって念仏を唱えている。以下、その日にちである。

- ・2月28日 鐘切らず（各自が家から持参した鐘をたたきながら念仏を唱える。）
- ・3月15日 御釈迦さん（御釈迦さまの掛け軸を飾る。）
- ・8月20日 堂祭り

#### (3)観音堂

観音堂は泉第二集落にあり、洞泉寺を正面とした際の左側に位置する。本尊は千手観音で、祭日は8月18日である。牛込の上組と下組、約20軒で管理をしている。

15～20年前までは毎月18日に堂に集まり念仏を唱えていたが、その後は正月である1月8日と観音様の祭りである8月18日の年2回集まることになった。しかし平成27年にその習慣も途絶してしまい、現在では念仏を唱えに集まることはない。念仏の参加者は牛込上組と下組、また牛込西組の数軒ほどであった。

#### (4)山居阿弥陀堂

泉第二集落の山居（さんきょ）阿弥陀堂は明治の初めに廃寺となった旧和泉山居涼風山松林寺跡（浄土宗）である。慶長8年弾誓（たんせい）上人の開基と伝えられる。阿弥陀堂は次第に建物や本尊の老朽化が進み、何度か修繕を試みたが建物を維持するには個人負担が大きいということで、平成25年に取り壊してしまった。現在では、取り壊された残骸やコンクリートでできた地蔵堂といくつかの石造物が残るだけである。堂の管理は牛込東組・西組の23～24軒が行っていた。堂があった頃は1月5日、1月17日、8月22日、12月10日に念仏が行われていた。

#### (5)得心堂

泉第三集落にある得心堂（とくしんどう）は、荒貴組と岩野組で管理されている。堂内にはお釈迦様の抱えた掛け軸や仏像がある。以前は、年に数回堂に集まり、念仏を唱えていたが、5～6年前から年に1回、7月24日に集まるだけとなった。この日には正法寺の檀家が集まり念仏を唱える。

#### (6)十王堂

十王堂（じゅうおうどう）は泉第三集落の北野神社の隣に位置する。北野神社の隣にあるため、人びとから天神堂（てんじんどう）とも呼ばれる。堂の管理は畑田組・町組・五丁弓組の1部で行われる。現在では、年に3回（1月5日、3月6日、8月25日）堂に集まって念仏を唱える。

#### (7)野方堂

泉第四集落に位置する野方（のがた）堂は、旧泉福寺（時宗）であり、明治の廃仏毀釈によって廃寺となり、堂になった。祭日は8月24日である。野方組と外城組で管理をしている。以前は年6回念仏を唱えるために堂に集まっていたが、現在は年2回行っている。以下が現在行っている念仏の日にちである。

- ・ 1月5日 御祈祷念仏（厄年の人など祈祷する。）
- ・ 8月24日 例祭（堂祭り、泉の祭りとして有名であった）

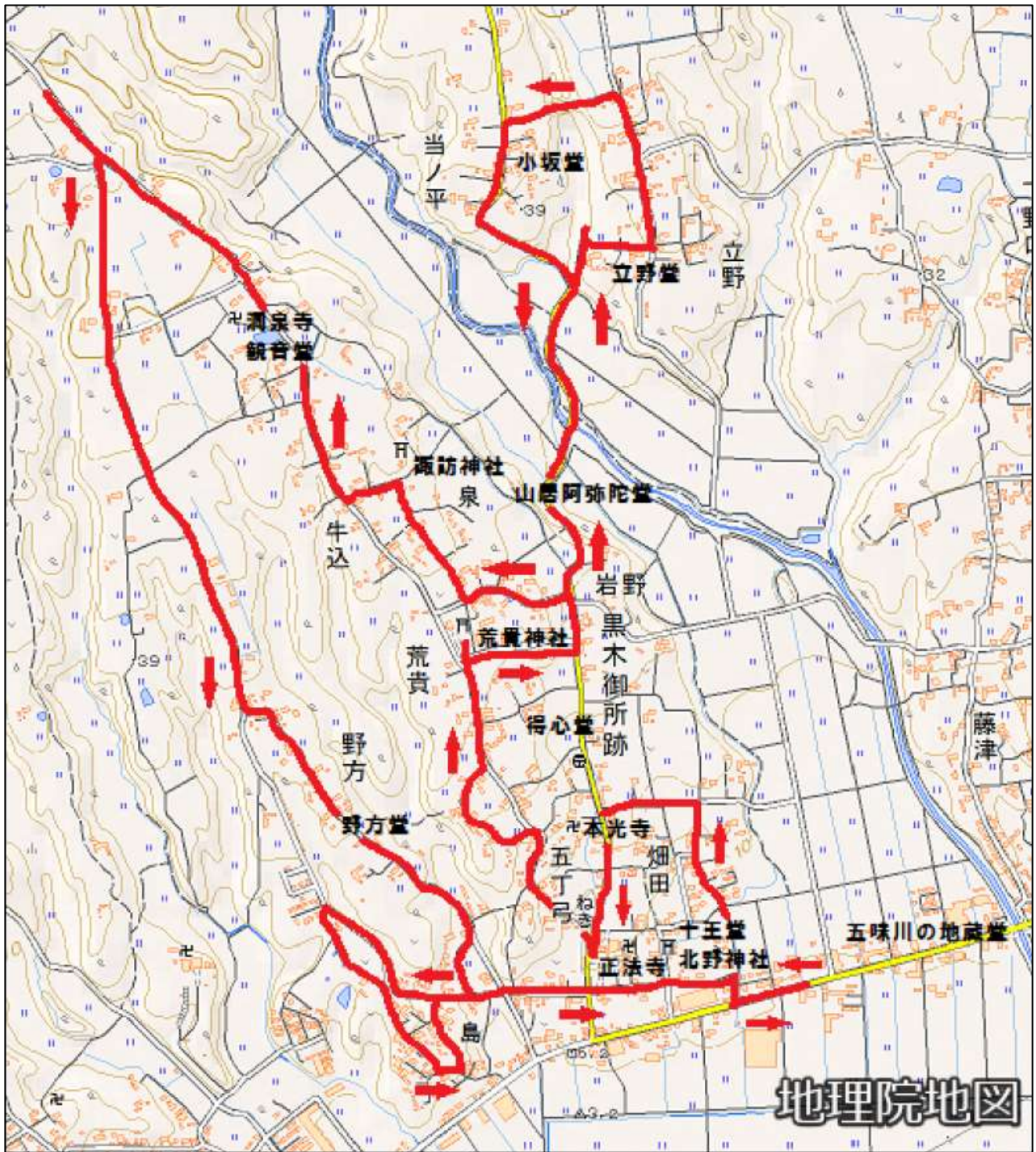
この他に10年以上前にやらなくなった念仏があり、以下の通りである。

- ・ 2月 百万遍念仏（大きな数珠を参加者全員で持ち、一つ一つ繰りながら念仏を唱えた）
- ・ 3月15日 お釈迦さま開き（当番の人だけが集まる。平成10年頃までは当番の家の人かチマキという金太郎あめのように切ると同じ柄の出る団子を作ってお供えしていたが、現在は白い団子を作ったり買ったりしてお供えしている。）
- ・ 3月19日 かねきらず（一日中鉦を叩く）
- ・ 7月 虫供養（義民供養のための念仏）

#### (8)地藏堂

五味川（ごみがわ）の地藏堂は、泉第五集落の国道沿いに位置する。現在では念仏を唱えるために集まりはしないが、以前は十王堂を管理する組と同じ地域の人が集まって念仏をあげていた。もともとは別の場所にあり、冬の雪が吹雪いている頃には、道しるべのような存在であったという。

調査報告「泉地区の民俗調査から」





## 閉会のごあいさつ

佐渡市教育委員会 社会教育課課長補佐 やなぎさわ 柳澤 まさじ 正二

佐渡市教育委員会社会教育課課長補佐の柳澤と申します。本日所用により不在の課長、渡辺に代わり、ご挨拶申し上げます。

会場にお越し下さいました皆さま、本日は長時間にわたりご清聴ありがとうございました。そして、加賀谷先生、飯島先生、学生の川口さんにおかれましては、貴重なご講演・ご報告・解説をお聞かせいただきまして、誠にありがとうございます。

この度のセミナーは新潟大学人文学部の皆さんをはじめ、地域の方々にご支援いただき開催することができました。重ねて感謝を申し上げます。今後も地域社会の発展と人材の育成に寄与するよう努めて参ります。

以上を持ちまして閉会の挨拶とさせていただきます。本日は誠に有難うございました。

新潟大学人文学部・佐渡市教育委員会連携協定事業

## 第8回 佐渡学セミナー記録集

発行年月日 令和2年2月29日

発行者 佐渡市教育委員会社会教育課 佐渡学センター